和漢比較文学　第五十七号　平成二十八年（二〇一六）八月一日発行

宇田栗園と漢詩

新稲法子

宇田栗園と漢詩

新稲法子

漢詩が衰退しつつある時代、個々の詩人たちはどのようなことを考え、どのように対処していたのであろうか。本稿では、宇田栗園という一人の人物を取り上げる。漢詩という文芸から離れた明治期の日本人の一例として、詩人としての宇田栗園、宇田栗園にとって漢詩とは何だったのかを考えたい。

はじめに

日本漢文学史の黄金時代ともいうべき近世から維新を経て、漢学が洋学に取って代わられると漢詩もまた衰退に向かっていった。明治期にはまだまだ漢詩を作る人たちがおり、印刷技術の発達や教育の普及などにより、詩壇は近世よりも活況を呈しているかのようであった。しかし、人々の漢詩という文芸に対する意識は徐々に変化していく。作詩層が激減したことの象徴として、新聞の漢詩欄がなくなったことがしばしば取りあげられるが、これは大正六年のことである。[1] そして昭和を経て平成の現代、漢詩は滅びたとまでは言えないにしても、短歌や俳句と比較すると、実作者の数は寥寥たるものであると言わざるを得ない。

一　勤皇家、官吏としての宇田栗園

宇田栗園[2]は、字は淵、号は栗園、静観亭。健斎とも称す。文政九年（一八二六）、現在の長岡京市にあたる洛西の神足（こうたり）村で実相院門跡家臣宇田利起の四男として生を享ける。宇田家は儒医の家柄で、栗園も初め医業に就いたが、岩倉具視の側近として活躍した。戊辰戦争では官

軍東山軍参謀長として従軍し、維新後は桂宮家家令、京都府大参事などを歴任。明治三十四年（一九〇一）、主殿寮京都出張所在任中に没、享年七十五。公家華族の和歌の会である向陽会の初代幹事を務め、歌集『栗廼花』がある。[3]

栗園の活動の多くは尊皇攘夷運動や幕末明治期の京都の歴史の研究によって明らかにされているが、『名家歴訪録』[4]についてはこれまで紹介されていないようなので、以下に引用しよう。『名家歴訪録』は当代の名家のインタビュー集といった趣の書物で、栗園もその一人として収録され、自身の生涯について語っている。

これによると栗園は二十歳のころ土川村（現在の京都市南区）で医者を始めたが、梁川星巌が京都にやって来たのをきっかけに、星巌の下で詩を学んだとある。そのときのことを栗園は次のように語っている。

> 処がご承知の通り星巌翁は勤王憂国の人でございますから、私共が詩を作って見て貰ひ、その話が済むといつも談が国事に及んで慷慨されるから、いつか知らず識らず夫に化せられて、国事が気にかかつてならんやうになりました。
>
> それで私も以前四書集註など読んでゐて、少しも感発する処がなかつたが、陽明の伝習録を読で初めて興起感発して、ぢッとしてゐられんことになり、学問は陽明でなけりやならんと思ひました。それで私の経歴中にも、自分の心に之は陽明先生のお蔭である、またこの様なことは陽明先生に叱られると思ふたことは屢々ありました。

栗園が作詩だけではなくその思想面で星巌に影響を受け、勤王思想と陽明学とに傾倒していったことがわかる。

師の星巌が安政の大獄で捕縛される直前に亡くなった後は、

> 然し其門に遊んだものは厳重に探偵され、私も土川村に居ます時で段々探偵を入られ、また隣家には村の番人即ち幕吏の手先を働らく者が居て、頻りに眼を配ってゐる様子が知れておる。然し其後も草莽有志の士が、幕吏の捜索を避て尋ねて参り、潜かに宅にかくまい置たことも屢々ありましたが、勉めて秘密にしてゐましたので、幕吏も気がつかず幸に無事でございました。

と、栗園自身も勤皇家としてかなり危険な状況にあったようだ。

思想面で大きな影響を受けた星巌亡き後、栗園が出会ったのが岩倉具視である。岩倉具視の下で栗園がどのような活動を行っていたのか、以下、紙数の関係もあり、本稿に関わる部分について小林丈広氏の『明治維新と京都　公家社会の解体』[5]が栗園に触れた内容を簡単にまとめてみよう。和宮降嫁を通じて公武合体を策した岩倉具視は、文久二年九月に脅迫文を投げ込まれ、「天誅」を避けるため京都郊外の農村を転々とした。岩倉の下には非蔵人の松尾但馬（相永）や藤井右門の曾孫藤井九成、薩摩藩の神官井上石見をはじめ、小林彦次郎（香川敬三）、北島秀朝、三宮義胤、大橋慎三、城多童、樹下茂国、山中清逸（献）、宇田淵すなわち栗園らが出入りした。松尾相永と藤井九成が隣り合って住んでいた上京の柳の図子が次第に会合の拠点となったため、これらの人々は「柳の図子党」と呼ばれている。戊辰戦争における東山道鎮撫軍は、岩倉具視の息子である具定・具経兄弟の下、参謀として乾退助（板垣退助）、伊地知正治と共に柳の図子党から栗園も従軍した。

小林丈広氏はまた、天皇の留守を預かる新政府の役所として明治二年に置かれた留守官について、栗園の存在の重要性を指摘している。留守官の長官には岩倉の古くからの同志である中御門経之が、次官に公卿出身の阿野公誠、判官に東山道鎮撫軍で活躍した河田景与と宇田淵が就任したが、「なかでも、宇田淵は、柳の図子党以来の岩倉御近で、京都在勤の官僚としてその後も長く岩倉への情報提供者として重要な役割を果たし続ける。「東京遷都」を推進する新政府の中でも、京都対策にもっとも腐心していたのは岩倉であったが、そのために留守官は重要な位置を占めたのである。[6]」という。

このように、栗園の業績は岩倉具視との関係を抜きにしては語ることができない。洛中を追放された岩倉に初めて会った栗園は、その人柄に感激したという。柳の図子党の一人となり、戊辰戦争にも参加した栗園は、東京奠都に際しては留守官として御所の保存に尽力した。留

守官は明治三年に宮内省に吸収されるが、栗園はその後も京都にあって能吏として京都の行政に腕を振るった。東京に生活の拠点を移した岩倉から、京都を任せるに足る人物として信頼を寄せられていたのである。

梁川星巌と岩倉具視という二人の人物との出会いは、栗園の人生において大きな意味を持っている。梁川星巌は栗園の思想を育み、岩倉具視は栗園に活躍の場を与えたといってよいだろう。

二　歌人としての宇田栗園

岩倉具視との信頼関係は、歌人としての栗園の活動にも大きく関わってくる。和歌史において栗園が注目されるのは向陽会の初代幹事を務めたことであるが、これは岩倉の推薦によるものだった。栗園の歌集『栗廼花』[7]の高崎正風序には次のように記されている。

おのれ翁と相知りしはいまより二十六年のむかしにて、そは明治十年の夏、西南のみたれおこり聖駕西京に駐りおはしましける程、彼地在住の華族のうへにつきて何くれと御心をそゝかせ給ふことありけるうち、「歌は各家祖先よりして世々修めこしみちなるに、維新の後これか研究を怠り斯道頓におとろへきたるはいとくちをしきこと也。いまより後は月々歌会をまうけ詠進せしめよ」との御沙汰、時の右大臣岩倉公にくたりしかは、

西南戦争の起こった明治十年、歌道の衰退を嘆いた明治天皇は、歌会を持つようにとの叡慮を岩倉具視に下した。これを受けて岩倉は直ちに高崎正風を招き、会について一任するが、御歌掛首長を務め、後に御歌所初代所長になる正風が東京を離れるわけにはいかない。

又御身はつねに東京に在て遥に監督せらるゝことなれは、細かなることはもとより親しくみるへきにあらす。何人か代りていたつくものなくてはかなはし。幸に桂岡御附宇田淵といふ謹厚忠実なる人あり。もと梁川星巌の門にありて儒学を修め詩を能くせしか、思ふよしありて近来歌道に入り、美作の志いと篤き人なるをもて、これをして幹事の任にあたらしめなは、必よく足下の指揮をあやまたず、会務を整理し事聖旨に副ひ奉ることを得べし。

そこで岩倉は、正風の代わりに実質的に会の運営に関わる適任者として、栗園に白羽の矢を立てたのである。

ところで、この『栗廼花』序文以外に設立当時の事情を知ることができるものに『高崎正風演説筆記』[8]がある。これは正風が明治三十四年に御歌所から出張して向陽会会員に向けて行った演説を、遠山稲子が速記したものである。この演説の目的の一つは、新しい会員に向陽会設立の趣旨を伝えることであったが、歌集の序文とは異なり関係者である公家華族のみを対象としている分、設立当時の事情は詳しく具体的に述べられている。とりわけ明治天皇の意を受けた岩倉具視が正風を説得するくだりには、生々しいものがある。

之はたゞ歌を読ますると云ふ斗りの目的で無く、左様な事迄皆廃つて仕舞うと自然に何もする事が無くなりて、遂ひに或は品行も堕落する様な事に成りはしまいかと酷だ心配に堪へぬ。祖先来従事し来つた道を研究し居たならば、己の学問の出来るは勿論、品行を保つ上から申しても大きに裨益があらふと思ふから、どうか一つ行つて呉れんか。

京都に留まった公家華族にとって、家職を失ったことは経済面だけでなく精神的にも大きな打撃であった。明治天皇は歌道だけではなく、蹴鞠や雅楽なども同様に奨励し、金員を下賜している。明治天皇が彼らの身の上を心配していたことを、同族である岩倉は十分理解していた。栗園は、こういった状況にある公家華族を束ねるに足る人物として選ばれたのである。

『高崎正風演説筆記』にはまた、

然るに近藤氏が又一昨年死去し、其代わりに会員一同で宇田氏を推挙した所が、同氏は至って謙遜な人で敢えて受けなかった。夫れからどうか良教師を得る迄の間仮に勤めて呉れと云ふことで、向陽会員并に私共の切なる勧告を受けて、漸う々々に諾せられたが、又思ひかけなく今春薨去せられた。実に此の向陽会に取っては此上も無き不幸を来しました。

とある。近藤氏は近藤芳介、御歌所から教授が派遣されていたのを廃止し向陽会が独立した際に、在京から選ばれて指導に当たった人物である。栗園はその後継者となることを会員から求められていた。実務的な能力を買われて幹事の仕事をしていただけではなく、和歌の指導も可能な実力を備えていたことがわかる。

本稿では栗園の和歌について触れる余裕がないが、公家華族の歌会の幹事に相応しい、上品で穏やかなものである。また勤皇家の一面や向陽会との関わりから、明治天皇の存在は無視できないであろう。『栗廼花』は冒頭の「歳旦天象」で

たちかへる年のあしたの初日影
くもらぬ御代をそらにしるかな

と明治の御代を言祝いで始まっている。

向陽会の設立の事情を踏まえれば、官吏としての栗園の活躍と歌壇におけるそれとは表裏一体をなしているのがわかる。維新後も留守官から桂宮家令、京都府大参事となり、御所の保存に奔走したことが栗園の業績のハード面だとすれば、向陽会の幹事を勤めたことはソフト面であり、栗園にとってはともに京都という都市を守るという畢生の事業だったといえるだろう。

三　詩人としての宇田栗園

このように、勤皇家また優秀な官吏として、文雅の面では歌人として知られる宇田栗園だが、その前身は詩人、しかも、かなり実力のある詩人だったことは、ほとんど知られていないようである。ここでは栗園と漢詩との関わりと、同時代人に栗園がどのように評価されていたのかについて述べておきたい。

宇田家は儒医を輩出した家柄で、栗園も儒学と医学を修めたが、栗園が最初に親しんだのは漢詩ではなく和歌であった。栗園の父宇田利起は本居大平の門人であり、栗園にも和歌を詠むことを勧めたからである。もともと栗園の育った乙訓地方は和歌と国学が盛んな土地柄であった。西国街道沿いの宿場町であった向日町を中心に、向日神社の神官であった六人部是香（号鱸舎）、是香に学んだ鳥羽屋九代目九郎兵衛（号桜居）らが文化サロンを形成していたのである。[9]

しかしながら、このとき栗園は和歌をすぐにやめてしまう。漢詩を好んだ兄たちの影響を受け、自身も詩を詠むようになったのである。神足宇田家を継いだ振振斎こと善継は栗園より十六才年長で、『向日里人物志』[10]の「詩」の項にその名が見える。乙訓地方の詩人たちの詞華集『西岡風雅』[11]には振振斎の他に栗園のすぐ上の兄秋嶺こと退蔵の作品も収められている。[12]退蔵についてはまとまった詩稿も現存しており、詩作に対する熱心さが窺える。栗園は最初この兄たちに漢詩の手ほどきを受けたのであろう。

既に述べたように、二十才を過ぎて栗園は梁川星巌の門下となった。栗園の詩集である『静観亭遺稿』[13]の谷鉄臣跋には、

栗園君與竹外翁友善。同學詩於梁川星巌。竹外嗜酒好奇、君好茶愛正。故其詩品各如其人。竹外看他人詩、至其好處、便叫妙。君則稱好。君之稱好與竹外叫妙、共爲詞林佳話。

栗園君と竹外翁友として善し。同じく詩を梁川星巌に学ぶ。竹外は酒を嗜みて、奇を好む。君は茶を好みて正を愛す。故に其の詩品各々其の人の如し。竹外他人の詩を看るに、其の好き処に至れば、便ち妙と叫ぶ。君は則ち好しと称す。君の好しと称すと竹外の妙と叫ぶと、共に詞林の佳話為り。

と、星巌門下で藤井竹外と栗園が並び称されていたエピソードが記されている。竹外は頼山陽の弟子として知られているが、天保三年の山陽没後は星巌に学んでいた。

明治十一年に刊行された竹外の『竹外二十八字詩』には、大沼枕山・森春濤・江馬天江という名だたる詩人と共に、栗園が圏点を施している。

師の梁川星巌が急逝し『星巌先生遺稿』が上梓された際には、栗園は江馬天江と共に凡例を担当した。このことからも栗園が、星巌門下においてその他大勢とは違う有力な弟子だったことが窺える。

栗園が最も作詩に熱心だったのは、星巌の在世中よりむしろ安政の大獄で捕縛される直前に亡くなって以降、文久年間から明治初期であった。師を失い、監視下で行動の自由も狭められたこの時期の栗園は、比較的時間の余裕があったのか地元で盛んに詩を作っていた。このころの栗園の活動が、後の乙訓漢詩壇の母体となっていく。『西岡風雅』の宇田泰による序文には、当時のことが次

のように記されている。

初文久元治間家君方家居無事教授之暇與諸同輩及從游諸子以詩相唱和一時傳爲盛事

初め文久・元治の間、家君家居事無きに方たり、教授の暇、諸同輩及び従游せる諸子と詩を以て相唱和す。一時伝へて盛事と為す。[14]

この後、栗園が京都に移住して指導者を失った乙訓の人たちが、いったんは会を解散するが、新たに共研吟社を結成し、再び栗園に指導を仰ぐようになったという事情が続く。

乙訓地方においては栗園没後も櫻井桂村という新たな指導者を迎え、大正年間に至るまで正木聳山らによって盛んに詩会が持たれるのであるが、乙訓漢詩壇の形成に栗園が果たした役割は非常に大きいものがある。[15]

詩人栗園の名は、星巌門下や乙訓地方だけでなく、全国的に知れ渡っていたようである。

「文久二十六家絶句」[16]を繙くと、鷲津毅堂、大沼枕山、森春濤といった現在でも名の知られた錚々たる詩人の中に、栗園も名を連ねている。

以上述べてきたように、文雅の面では歌人として知られる栗園の前身は、詩人であった。梁川星巌門下で江馬天江と共に遺稿の上梓に関わる程の弟子だっただけでなく、地元乙訓地方でも後進を育成し、漢詩隆盛の基礎を築いたのである。高槻における藤井竹外の知名度を考えると、隣接する乙訓の詩人として栗園はもっと評価されるべきであろう。

四　栗園の詩風

ここで栗園の作品をいくつか紹介しよう。

栗園の詩集は『静観亭遺稿』と題し、明治四十四年の満十年忌紀念に上梓された。題字は小野湖山、栗園自筆の七絶、写真、中野太郎による「宇田先生行状」を付し、圏点・跋は谷鉄臣による。詩体は七言絶句が最も多く一七三首、七言律詩が七首、五言絶句が九首、五言律詩が三首。総計一九二首である。本書の緒言には、

先生詩律極厳。不但許可人、最不自許可。製作多不留稿。今從家藏故紙堆中蒐録。加以坊刊所鈔。

先生詩律極めて厳なり。但だ人を許可せざるのみならず、最も自ら許可せず。製作多く稿を留めず。今家蔵の故紙堆中従り蒐録し、加ふるに坊刊鈔する所を以てす。

とあり、もともと作品を厳選していたことがわかる。これに加えて、梁川星巌について学んでいた頃の作品は、星巌の死後、弟子として累が及ぶのを避けるため処分してしまったものもあったであろう。また、『栗廼花』跋に「君断然として詩を廃し、自ら其の稿を焚き」とあり、漢詩を作ることを廃した際には詩稿を焼いてしまっている。『静観亭遺稿』が栗園の詩の全貌を伝えているのではないことは、確認しておく必要がある。

さて、『静観亭遺稿』巻頭に栗園の自筆で収録された「山茶初華　山茶初めて華さく」が、その扱いから代表作とみなしてよいであろう。

雨葉鱗鱗翠色新　雨葉鱗鱗翠色新たなり
梅花頭上別成春　梅花の頭上別に春を成す
歳寒勁節誰相識　歳寒くして勁節誰れか相ひ識らん

一片丹心吐向人　一片の丹心人に向かひて吐く

人々が好んで詠む梅花ではなく、椿に着目したもの。節を守る喩えとしては冬の寒さにも変わらぬ松柏がよく用いられるが、ここで椿を取り上げたのは「丹」と椿の花の赤さをかけ、「一片の丹心」を効かせたからである。結句の「人」は詩人栗園を指し、椿は同じように節を守る生き方をしている栗園なら気付いてくれるだろうと、その花を栗園に向けて咲かせたというのである。[17]勤皇家としての栗園の生き方をよく表した作であると言えよう。

『静観亭遺稿』には栗園の出身地である乙訓地方の名所を詠んだものも多い。「長岡雑詠」はその一つである。

菅廟梅花歳歳新　菅廟の梅花歳歳新たなり
當時此處是楓宸　当時此の処是れ楓宸
遊人莫作黍離嘆　遊人作す莫かれ黍離の嘆
一鼎依然萬古春　一鼎依然方古の春

「菅廟」は長岡天満宮のこと、「楓宸」は朝廷のことで、承句は長岡京を指している。乙訓地方の詩人たちの作品には、かつて都が置かれたことを誇りに思って詠んだも

のが少なくない。黍離の嘆はかつての西周の都、鎬京が廃墟になり、宮殿に黍が生い茂っている様子を詠んだ詩経王風の「黍離」による語。「麦秋」と共に亡国の嘆きとして用いられる。

旅人に向かって栗園は、ここはたしかにかつての都だが、亡国の嘆きを感ずることはない。日本という国は滅んだわけではなく、ずっと続いてまた春を迎えているのだからと言う。故郷の名所を詠みながら、勤皇家の面がちらりと表れる。

「示諸子　諸子に示す」には指導者としての栗園の一面が表れている。

小杜兵談素絶倫　小杜兵談素と絶倫
豈徒薄倖過青春　豈に徒に薄倖青春を過ごせしや
寄言詩社諸年少　言を寄す詩社諸年少
莫作迷花中酒人　花に迷ひ酒に中る人と作る莫かれ

「小杜」は杜牧。杜牧は「贏得青樓薄倖名　贏ち得たり青楼薄倖の名」（「遣懐　懐ひを遣る」）という句に表れているようなただの放蕩者ではない、孫子の註釈を著し重厚な詠史詩を詠むなど、兵談をさせたらずば抜けているのだ。諸君、誤った影響を受けて身を持ち崩すな。

南宋詩風の田園詩も多い。「西岡春暁」は、

菜圃花黄麥隨青　菜圃花は黄にして麦隨は青し
天鵶上下不停聲　天鵶上下声停めず
六十餘村春一色　六十余村春一色
人隨牛後入京城　人は牛後に随ひて京城に入る

「菜圃花」は菜種油を取るための菜の花であろう。乙訓地方の絞油商人弥兵衛家は豪商として知られ、文人たちに財政支援をするほどであり、自身も文雅を嗜んだ。幕末の岡本宣頭（弥兵衛）が詠んだ和歌が向日神社に残っている。「天鵶」はひばり。京都に程近い乙訓地方の、美しく豊かな自然を描き、どことなく杜牧の「江南春」を思わせる。

「夏日雜吟」と題する連作五首の其の五は、そんな乙訓での栗園の暮らしを詠んでいる。

葦簾高揭足風涼　葦簾高く掲げて風涼足る
無復塵埃侵座牀　復た塵埃の座牀を侵す無し
城裡故人應羨我　城裡の故人応に我を羨むべし
秧田綠繞讀書堂　秧田の緑は繞る読書の堂

「城裡の故人」とは京都にいる友人をいうのであろう。蒸し暑く人気の多い京都から程近い乙訓の地で、夏の郊外の暮らしを満喫している様子が伝わってくる。

栗園の作品には妻が登場するものもある。「晏起」、朝寝坊はその一つである。

一幅鶉衾敵曉寒　一幅の鶉衾暁寒に敵す
間營腹稿起來難　間に腹稿を営みて起き来ること難し
山妻不識詩情苦　山妻は識らず詩情の苦しみを
只問病襟安不安　只問ふ病襟の安きと安からざるとを

「鶉衾」はぼろぼろになった布団。「腹稿」は、紙筆を用いずそらで漢詩を作ること。頼春水の『在津紀事』に、混沌社では専ら腹稿で、下書きをしなかったことが記されている。布団をかぶったまま詩を考えて唸っている栗園を、そうとは知らない妻がどこか具合でも悪いのですかと心配している。栗園の幸せな家庭生活を垣間見ることができる。

以上、ごくわずかの作品を紹介したが、『静観亭遺稿』を繙いた限りでは、栗園の漢詩は中晩唐や南宋詩の影響を受け、日常生活の真情を詠んだ作品が多い、典型的な近世後期の詩風であると位置づけられよう。

五　漢詩から和歌へ

文雅の面では栗園は歌人として知られ、詩人であったことは忘れ去られているのは無理もない。栗園は漢詩を詠むのを自ら廃し、和歌に転じたからである。

平仄や韻など守るべき規則が多い漢詩には向かず、他の文芸に移るというのは、珍しくはなかったであろう。その例として、江湖詩社の詩人の一人であった小島梅外があり、排斐高氏が「大梅論――詩から俳諧へ――」で論じている。[18]

栗園のケースが珍しいのは、詩人として十分な実力があり、高い評価を受け、故郷で後進を育てるまでに至ったにも関わらず、漢詩から和歌に移ったことである。

栗園が漢詩を詠むのをやめ、和歌を詠み始めた時期はいつごろであろうか。既に引用した『栗廼花』高崎正風序に、西南戦争の年の岩倉具視の言葉として、

もと梁川星巌の門にありて儒学を修め詩を能くせしか、思ふよしありて近来歌道に入り、美作の志いと篤き人なるをもて、

とあった。同様のことは向陽会設立に関する他の記述にも見える。これらによると、明治十年の時点で栗園は既に歌の道を志していたということになる。

『栗廼花』の谷鉄臣跋は明治三十七年三月に記されたものであるが、「予與君相知四十餘年焉　予君と相知ること四十余年」とある。維新前は彦根藩の医師を勤めた谷鉄臣は漢詩も詠み、江馬天江等と交遊があった。おそらく栗園とはこういった漢詩仲間を通じて知り合ったのであろう。明治三十七年の「四十余年」前といえば文久年間にあたるが、これは既に述べたように栗園が最も作詩に没頭していた時期に一致する。谷鉄臣はこの後に、

居數年君斷然廢詩、自焚其稿、與高崎男正風等專攻和歌

居ること数年、君断然として詩を廃し、自ら其の稿を焚き、高崎男正風等と専ら和歌を攻む

と記しているが、文久年間から「数年」後というと、ちょうど維新の前後にあたる。

高崎正風の序文には西南戦争というはっきりした年次と岩倉具視の発言があり、長年にわたり親しかった谷鉄臣の跋文も信頼に足る。また『栗廼花』は栗園の息子豊四郎が刊行に携わっているから序跋の内容の事実関係は当然確認しているだろう。これらの文章から栗園が漢詩を詠むのをやめたのは維新の前後だと推測できる。明治元年ならば四十一歳のことである。

いくら岩倉具視の信任が厚かったとはいえ、後の向陽会幹事に推薦されるためには、明治十年の時点で相応の和歌の修養が必要である。維新前後に学び始めたとすれば妥当な年月といえるだろう。

『栗廼花』序文には「思ふよしありて近来歌道に入り」とあり、跋文には「断然として詩を廃し」「自ら其の稿を焚き」という。これらの表現の文学的修辞は差し引いても、特別な場合を除いて、和歌を詠み始めた栗園が一方で漢詩も詠み続けている可能性はないと考えるのが自然である。

向陽会では漢詩を詠むことはなかったらしい。刑部芳則氏は向陽会の下賜金に関する記述で「京都公家華族たちは和歌の練習に励んだが、次第に漢詩を詠む者の数は減少した[17]」と述べており、向陽会では当初和歌と漢詩の両方を詠んだととらえているようであるが、向陽会の冷泉為弘氏の調査によると、記録上は漢詩を詠んだことは確認できないとのことである。栗園側の史料から見ても栗園は詩人ではなく歌人として向陽会幹事を務めている。一方、宇田家には栗園が乙訓の人々と詠んだと見られる和歌の短冊が伝わっているという。栗園は公私ともに詩人ではなく歌人となったのである。

ただ、一時は詩人として名を馳せただけあって、断ち切れない繋がりはあっただろう。自らが指導した乙訓の詩人たちが『西岡風雅』を出版した際、栗園は題辞を寄せている。

謬向吟壇作主盟　謬まりて吟壇に向いて主盟と作り
恍然一夢十餘春　恍然一夢十余春
故園風雅今如此　故園の風雅今此の如し
且喜斯文有替人　且つ喜ぶ斯文に替人有るを

（『西岡風雅題辞其の三』『西岡風雅』・『静観亭遺稿』所収）

初句の「吟壇に向いて主盟と作り」とは、詩壇の盟主であったという意味。承句に「十余春」とあるのは、『西岡風雅』刊行時から遡ると幕末から明治初期を指し、序文にいう「文久・元治の間」とさほどのずれはない。『西岡風雅』は明治十五年の序があるので、この詩は栗園が和歌に移ってから詠んだことになるが、栗園は、故郷で詩社を主宰していたことを、すっかり過去のこととして追憶している。

『西岡風雅』序文には乙訓の人々が維新後栗園に再び作詩の指導を乞うたことが記されているが、それを反映するかのように長岡京市の正木彰家文書の詩稿には、栗園が批閲したものが残っている。ただ年次が確認できるのは明治十一・十三年のものであり、明治十五年序の

『西岡風雅』刊行が栗園にとっても一つの区切りであったことを窺わせる。この他、明治十八年三月から十九年に刊行された『熙朝風雅』では、栗園も評点者を務めている。こういったことは詩を作るのをやめてからもある程度行っていたようだが、指導者としての活動は、当時の詩人の収入源であることも考慮せねばならないだろう。

ところで既に考察したように、栗園が漢詩から和歌に移った時期を維新前後、四十歳の頃とすれば、『静観亭遺稿』所収の中野太郎による「宇田栗園先生行状」に「晩年不作詩　晩年詩を作らず」「於是専作和歌　是に於いて専ら和歌を作る」とあるのをどう考えればよいだろうか。『名家歴訪録』でも当時七十歳の栗園が「また私は近年歌を詠みますのを」「詩は近来作らんことにしました」と語っているのである。

実は栗園が和歌を詠み始めた時期はともかく、歌人として活躍するのはまさに晩年なのである。『高崎正風演説筆記』によると、明治十年に叡慮が下されたあと、十二年には桂宮御殿で歌会が行われているが、東京の御歌所から教授が出張するのが廃止され、歌会が京都で自立して活動し始めるのは明治二十二年、栗園六十二歳のことだった。その七年後、六十九歳の時には栗園宅で高崎正風が講話をしている。七十三歳の時には向陽会教授に就任しているが、これは数年固辞した末のことだという。従って、『名家歴訪録』で黒田譲が訪れたころは、栗園の向陽会における存在感が大きくなっていた時期だったのである。

以上、まだ検討すべき点はあるが、栗園が漢詩から和歌に移ったのは維新前後だったと推測できるであろう。

次に、栗園が漢詩を廃して和歌の道に入ったのはなぜだったのか、『栗廼花』序文の「思ふよし」について考えたい。

和歌を詠み始めたのが維新前後、四十歳の頃だったという推測が正しければ、栗園の生涯において、戊辰戦争に官軍として参加し、零落激しい京都で岩倉具視の側近として奔走していた時期である。そのような状況下で、勤王思想の持ち主であった栗園が、天皇を中心とした貴族社会の文雅として、漢詩ではなく和歌を選んだということは十分考えられる。

少年時代から漢詩を詠み始め漢詩人として活躍していた人物が、中年以降に和歌の道に分け入って公家華族の歌会の幹事を務めるに至るなど、並大抵のことではない。栗園が才能に恵まれていたのはもちろんであるが、それに加えて、国学・和歌の盛んな地域に育ち、大平の門人だった父に勧められ、幼い日に和歌を嗜んだことがあるという素養も、栗園が和歌に転じるのを後押ししたに違いない。

栗園は漢詩ではなく和歌こそ日本の詩形であるという。『静観亭遺稿』に収められた中野太郎の「宇田栗園先生行状」には、

晩年不作詩。曰詩非我固有。陽春白雪。和者愈少。不足恠也。於是専作和歌。蓋詩學所蘊。發爲永言。性霊流露。琅琅可誦。

晩年詩を作らず。曰く、詩は我が固有に非ず。陽春白雪、和する者愈いよ少なきこと、恠しむに足らざる也と。是に於いて専ら和歌を作る。蓋し詩学に蘊する所、発して永言と為す。性霊流露し、琅琅誦す可し。

とあり、漢詩は日本固有のものではないという栗園の言葉が記されている。さらに栗園は漢詩は高尚すぎて詠む者は少なくなっていくだろうと予言している。

また、『名家歴訪録』は栗園が詩を廃した理由について語ったことを要約し、

本邦自づから和歌の在るあり、強て外国の詩形を仮て以て胸臆を慮るに及ばず、冷泉為輔郷の歌に、

これのみぞ人の国より伝はらで神世をうけししき島の道

とある、其和歌にて足れり、否、寧ろ之を学ぶが邦人の本色なり、云々。

と記すが、ここでいう「外国の詩形」とは漢詩をいうのであろう。

では、日本固有のものではない漢詩を日本人が詠むことの問題点とは何であろうか。谷鉄臣は『栗廼花』の跋で、栗園の言葉を次のように記している。

漢詩在彼則有聲韻感人者而在我則侏離不多入耳。雖巧過李杜亦何益哉。若夫萬葉古今則我之詩。然而人

丸貫之則我之李杜。已吾將記我之詩然也。

漢詩は彼に在りては則ち声韻人を感ぜしむる者有り。而れども我に在りては則ち体離にして多くは耳に入らず。巧、李・杜に過ぐるも亦何ぞ益ならん哉。若し夫れ万葉・古今は則ち我の詩なり。然して人丸・貫之は則ち我の李杜なり。已に吾将に我の詩を記さんとすること然り。

つまり、漢詩の音韻面について、中国語を知らない日本人には理解できないことを指摘しているのである。

しかしながら、こういったことは漢詩が最も盛んに詠まれた近世の詩人にとっても当然過ぎる指摘である。明治の代になぜことさらにこのようなことを言うのであろうか。谷鉄臣が記した栗園の言葉は次のように続く。

且夫近世々界交通博矣。果曰學外國詩則欧米各國之詩、亦不可不攻。豈唯漢詩而止哉。吾則且用我歌以發揚我國人之性情、而鼓吹聖世之休明也耳。

且つ夫れ近世々界交通博し。果たして外国の詩を学ぶと曰はば、則ち欧米各国の詩、亦攻めざる可からず。豈唯だ漢詩のみにして止まざらんや。吾は則ち且つ我が歌を用ゐ以て我が国人の性情を発揚し、聖世の休明を鼓吹するなるのみ。

ここでは漢詩が唯一の詩ではなく、欧米を含む世界の詩の一つに相対化されている。明治の代であるからこそ、外国語の詩として漢詩を相対的に捉え、日本語で詠む歌にはない不自由さを自覚したのである。

栗園の歌集『栗廼花』序で高崎正風は、

「始あらさることなく克く終あることすくなし」と古人のいひしは、けにさること也かし。さるはたまたまさる器量の人あらんにも、或はゆくりなく世を早うし、またはさしあふことのありて志をあらためなと、かにかくに有終の美を、さむことはいと難かなるわさなるを、故従三位宇田淵翁の如きは、やゝ此古語にかなへるひとゝやいはまし。

と「詩経」大雅蕩の「初め有らざるなし、克く終わりあるは鮮し」を引き、栗園はそれができた数少ない一人であるとする。これは末尾の

おのれはたゝ翁を向陽会にすゝめられし岩倉贈相国の眼力の処たかはて、翁の始終一貫聖意を遵奉し、此会にいたつかれて今日の盛運に向かはしめたる功績をしるして、その遺言の責をふたくこと、はなしぬ。

に照応していて、栗園が「始終一貫聖意を遵奉し」、向陽会を隆盛に導いたことも勤皇家として称えているのである。このただ一筋に力を注いで物事をやりとげるという人物像は、栗園にとって知己の言といえよう。

先に引用した栗園の代表作と言える七絶「山茶初めて華さく」も、「歳寒くして勁節誰れか相い知らん　一片の丹心人に向かひて吐く」と実に勤皇家らしい作品であった。漢詩を廃して和歌に移ったのは文雅の面では転向であるかもしれないが、勤皇家栗園の人生においては、漢詩人であることも向陽会幹事も何ら矛盾せず、一筋の線上にあったのである。

むすび

以上、向陽会初代幹事を務めた歌人として知られる宇田栗園の前身が漢詩人であったことを明らかにし、漢詩を詠むことを廃し和歌の道に入ったのはいつ頃かを推定し、その理由として考えられる可能性を指摘した。

漢詩から和歌に移った時期については維新前後と推測したが、これはいわゆる漢詩改良論が盛んになるよりかなり早く、栗園の先見性が窺える。理由については、維新期の栗園がその活動を通じて和歌こそ日本固有のものであることを改めて自覚したこと、漢詩を外国の詩の一つとして相対化することができる時代になったことが挙げられる。これについては他の詩人にも共通する問題であり、より詳しく検討する必要がある。また、栗園の和歌作品については触れることができなかった。共に今後の課題としたい。

[注]

(1) 石川忠久「漢詩を作る」(あじあブックス001大修館書店刊、一九九八年、三頁)に「旧友船津富彦元東洋大学教

授の調査による」とある。

（2）本稿では栗園で統一する。

（3）以下、宇田家の人々についての記述は日浅忠行氏による宇田家系図に従った。

（4）黒田譲『名家歴訪録』中編　明治三十四年。

（5）小林丈広『明治維新と京都　公家社会の解体』臨川選書14　臨川書店　二〇〇二年。

（6）（5）、七十三頁。

（7）宇田淵著、宇田豊四郎編『栗廼花』明治三十七年。以下、翻字は稿者による。

（8）高崎正風述、遠山稲子記『高崎正風演説筆記』三上庄次郎　明治三十四年。句読点は稿者による。

（9）向日市文化資料館平成二十五年度企画展「「向日里人物志」の世界――近世乙訓の文化サロン――」図録。

（10）多田吉宏氏所蔵。

（11）『西岡風雅』明治十五年序、向日市文化資料館蔵本による。

（12）新稲法子「長岡京市正木彰家文書の詩稿について（三）」（『上方文藝研究』第12号、二〇一五年）「2乙訓漢詩壇の詩人たち」。

（13）宇田淵『静観亭遺稿』明治四十四年。大阪府立中之島図書館蔵本による。

（14）（11）に同じ。

（15）新稲法子「長岡京市正木彰家文書の詩稿について」「同（二）」「同（三）」（『上方文藝研究』第10・11・12号、二〇一三・二〇一四・二〇一五年）。

（16）富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詞華集日本漢詩』8　汲古書院　一九八三年所収。

（17）新稲法子「長岡京市正木彰家文書の詩稿について（二）」（『上方文藝研究』第11号、二〇一四年）において誤った解釈をしているのでここに訂正する。

（18）揖斐高「大梅論――詩から俳諧へ――」（『江戸詩歌論』汲古書院二〇〇一年所収）。

（19）刑部芳則『京都に残った公家たち　華族の近代』歴史文化ライブラリー385　吉川弘文社刊、二〇一四年、二四〇頁。

【付記】本稿は、平成二十六年十一月二十九日に大阪大学で行った和漢比較文学会第百二十五回例会（西部）における口頭発表に基づくものです。席上、その他の場においてご教示下さった皆さまに厚く御礼申し上げます。また、向陽会に関しては霞会館京都支部の冷泉為弘氏のご教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

（にいな　のりこ・佛教大学非常勤講師）